

[原 著]

血液透析を続けながら生活する女性の思い

二本柳 玲子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科成人看護学講座

要 旨

本研究の目的は、血液透析を続けながら生活する女性に焦点をあて、その思いを明らかにすることである。透析導入後から1カ月以上を経過し、週3回血液透析を受け、就労もしくは家事に従事する10名を対象に半構成的インタビューを行いデータ収集し、質的帰納的分析を試みた。

分析の結果、透析導入前後から導入後1, 2年の間に【透析に対する否定的感情】を抱き、【透析が及ぼす生活上の困難】を経験しながらそれらの現実を受け容れていくこと、さらに導入後約3年を経て【透析と付き合っていくという諦観】を得て、【透析がもたらした発展的变化】へと展開することが明らかになった。また、その経過とは別に【病気の母親ゆえの子供への思い】と向き合いながら、状況により【母親役割維持の追求】【母親としての挫折感】【ケア役割という責務】という思いを抱くことが明らかになった。

キーワード

血液透析, 思い, 女性, 看護

I. はじめに

わが国において慢性透析療法を受けている患者数は、2011年末には初めて30万人を超え、女性患者は11万人以上にのぼる¹⁾。腎移植を望む患者も多いが、わが国ではその主体を生体腎移植に頼っており、移植件数が非常に少ない状況にある²⁾。この意味において血液透析は長期にわたって続くという慢性性を有しているといえる。

慢性疾患は生活への影響が大きく、患者は日常生活に及ぼす影響という点から病気を経験することになる³⁾。また、女性は他者との関係や相互作用を重視し、さらに他者のケアをする役割あるいは責任を持っている⁴⁾ことを合わせ考えると、血液透析を受けながら生活する女性が、家事や育児をはじめ、介護、近隣や親族とのつきあい等多重な役割を持つなかで、さまざまな思いを抱きながら日常生活を送っていることが類推される。

2002年に実施された透析患者の社会復帰状況に関する調査によると、女性患者全体の約6割、30～74歳の半数以上が家事に従事し⁵⁾、女性患者は男性に比して高齢になるまで家庭内で一定の役割を担い続けている⁶⁾ことが明らかになっている。

透析患者に関する研究を概観すると、透析をしなが

ら生活している人々の well-being に関する非常に多くの量的研究があるが、質的研究はほとんどないことが明らかになっている⁷⁾。女性透析患者の適応・spirituality・健康を調査した研究⁸⁾、血液透析患者の心理カテゴリー⁹⁾、外来血液透析患者の病いの体験¹⁰⁾といった質的研究、また、慢性腎疾患患者の主観的体験世界¹¹⁾、透析をしながら働く中年期男性の生活史の編みなおし尺度の開発¹²⁾といった男性に焦点をあてた研究はあるが、女性透析患者に焦点をあてた質的研究は少ない。

本研究では、血液透析を続けながら生活する女性に焦点をあて、その過程で抱く思いを明らかにし、看護支援の方向性を検討することを目的とする。

II. 用語の定義

本研究では、広辞苑（第五版）、比嘉による spirituality の規定¹³⁾および浅沼の思いの定義¹⁴⁾を参考に、思いを以下のように定義する。

思い：主観として語られる、自分自身やある事柄、出来事、人との関係性、将来の見通し等に対する気持ち、感じ方、見方など。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的記述的研究

2. 対象者

医療機関で週3回、外来血液透析療法を受けており、就労もしくは家事に従事している女性とした。な

<連絡先>

二本柳 玲子

〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢1757

北海道医療大学 看護福祉学部 看護学科 成人看護学講座

表1 研究対象者の概要

対象者	年齢	婚姻	就労	透析歴	家族構成	透析回数
A	50歳代後半	既婚	会社勤め	2年10ヶ月	夫、子供2人、夫の母	週3回
B	40歳代前半	既婚	主婦	4年4ヶ月	夫、子供2人	週3回
C	40歳代前半	離婚	パートタイマー	7年5ヶ月	子供1人	週3回
D	40歳代前半	未婚	無職	26年0ヶ月	母	週3回
E	60歳代前半	既婚	自営業	5年5ヶ月	夫、子供2人	週3回
F	30歳代後半	既婚	主婦	7年1ヶ月	夫、子供2人、両親	週3回
G	60歳代前半	既婚	主婦	6年5ヶ月	夫、子供2人	週3回
H	60歳代前半	既婚	パートタイマー	3年4ヶ月	夫、子供2人	週3回
I	40歳代前半	既婚	主婦	4年11ヶ月	夫、子供1人	週3回
J	60歳代後半	既婚	主婦	1年6ヶ月	夫、子供2人	週3回

お、75歳までの女性患者のうち半数が家事に従事している実態を踏まえ、対象者の年齢を20～75歳未満とした。また、透析導入後1ヶ月以内の患者は除外した。

3. データ収集方法

血液透析を続けながら生活する女性の思いについて半構成的面接を行った。体調の変化に気づいてから、これまでの経過についての質問を契機に、透析を続けながらの生活における思いについて、患者の語りの内容を大切にしながらインタビューを進めた。具体的なインタビュー内容は、現在の生活のようすやその生活に対するとらえ方、透析導入後の生活や考え方・感じ方の変化などであった。インタビューの場所と日時は対象者の希望に合わせて設定し、対話の内容は対象者の許可を得て録音した。データ収集期間は2004年6月～10月であった。

4. データ分析方法

インタビューの内容を逐語録に書き起こし、以下の手順で分析を行った。なお、分析の過程で質的研究者のスーパーバイズを受けた。

- 1) 対象者ごとに逐語録を読み込み、対象者の語りの内容全体を把握するよう努めた。
- 2) 逐語録から、血液透析を続けながら生活する女性の思いについて、舟島の看護概念創出法におけるコード化の実際¹⁵⁾を参考に、語りの文脈を損なわないように抽出しコード化した。なお、血液透析に至る原因となった腎疾患へ対処した時期は、インタビュー時の生活にも影響を及ぼしていると考え、その時期の思いも抽出した。
- 3) 3名の対象者のコードから、同じ意味が述べられているものを類型化し、他の対象者の逐語録をそれと比較しながら分類し、既にあるものに分類できない場合は新しい類型を作った。
- 4) 類型化したものからサブカテゴリーを抽出し、その抽象度を高めながらカテゴリーを生成した。

5. 倫理的配慮

研究対象者の選定に際しては、医療機関の看護部門および透析部門責任者に研究目的・方法、倫理的配慮について説明し、対象候補者の紹介を依頼した。その後、対象候補者に対し、同意書を提示の上、研究目的・方法、参加は自由意思であること、いずれの時点でも中断・中止が可能であり、それによる不利益は一切生じないこと、匿名性を確保し、プライバシーの保護を約束することを説明し、研究参加の同意を得た。

IV. 結果

1. 対象者の概要

対象者は、30歳代後半から60歳代後半（平均50.8歳）の女性10名であった。原疾患は慢性糸球体腎炎4名、IgA腎症2名、妊娠高血圧症候群、グッドパスチャー症候群、膜性腎症、原因不明が各1名であった。婚姻・就労状況、透析歴、家族構成、透析回数は表1の通りである。

2. 血液透析療法を続けながら生活する女性の思い

対象者の語りを分析した結果、カテゴリー8項目、サブカテゴリー25項目が得られた（表2）。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、対応するデータを斜体で表記し、以下に説明する。

1) 【透析に対する否定的感情】

<得体の知れない透析>は、透析導入前後の時期に、透析を受ける現実から派生した不確かさや不安、恐怖などで、今後の予測がつかない、自分に起こっていることが把握できないという思いである。

透析を受けるっていうことがどういうことかわからないし、生活がどう変わっていくのかわかんないし、で、自分の身体がどうなっていくのかわからなくて…（中略）、もうほんとに、子供の面倒も見れないんじゃないかって思ったし。知識がないですから、透析の。（B氏）

表2 血液透析を続けながら生活する女性の思い

カテゴリー	サブカテゴリー
透析に対する否定的感情	得体の知れない透析
	受け容れ難く疎ましい透析
	外見が損なわれる苦痛
	透析という荷物の重み
透析が及ぼす生活上の困難	透析によって束縛される時間
	女性ゆえの就労・経済面の困難と不安
	自己管理行動の苦勞
	主婦役割と食事管理の両立の葛藤
透析と付き合っていくという諦観	自己の一部となった透析
	普通に生きるという信念
	病気を忘れてはいけないという自戒
透析がもたらした発展的变化	透析によって得た新たな自己
	支えの存在の感得
	透析とともに生きるための知恵と工夫
	死の意識による人生の深まり
病気の母親ゆえの子供への思い	子供の行く末を案じ断念した妊娠・出産
	病気の母親を持つ子供への負い目
	子供にはさせたくない病気体験
	子供に残したい生き様
母親役割維持の追求	出産・育児は女性の領域
	病気の対処より優先された育児
母親としての挫折感	理想の母親像具現の過酷さ
	母親役割と療養行動の葛藤
ケア役割という責務	病気でも引き受けるしかない介護
	透析が奪っていくケア役割

＜受け入れ難く疎ましい透析＞は、導入前から導入後1、2年の間に抱いた、透析に対する拒否的な思いの総体であり、拒絶・拒否・嫌悪・恐怖・希望の全喪失感といった思いで構成される。

透析をしたということではいろんな危険を伴いますよね。簡単なものではないということを知っているし、見ているので。頭の中では避けたいっていうか、いやだになっていうか、恐怖心、すごくありましたね。(A氏)

これから先、週何回か（透析を）受けていって生きながらえていくのかな、でどうなるんだろうっていう…。(A氏)

＜外見が損なわれる苦痛＞は、シャントの穿刺跡や手術痕などボディイメージの変化を経験し、それらに向けられる周囲の視線に苦痛を感じた思いである。また透析導入を医師に告げられた際、透析患者に見られる皮膚の色素沈着をイメージし、強い拒絶感を抱いた思いも語られた。

2回目のシャントとかがって結構傷がありますよね。夏に半袖着るじゃないですか。やっぱりこの辺に注射の跡とかあると、覚醒剤やってるのとかって。言われたり何回もありますよ。(中略) そういうのはなんかすごくやだなあっていうか…。(C氏)

透析始めたとき、先生！私絶対透析患者の色黒いのいや！私あれになったら死ぬからね！絶対黒くしないでって言って。(E氏)

＜透析という荷物の重み＞は、透析を受けるという障害を背負ったことを自覚し、常に危険な思いをしながら透析に臨むという思い、“重いもの”を背負って生きているという思いである。

余力ある限りはやらなきゃという使命感で来てるのかな…。患者さんの、それこそ頑張り、根気が続く限りの治療ですよ。根気負けしたら終わり。透析ってそういうものだと思う。(H氏)

わりと腎臓っていうのは大切な部分、ですよ。やっぱり生死に関わるみたいな。(中略) 結構なんか…重いものをこう背負ってしまったかなってことかしら。(中略) それも一緒に持って進むしかないよね、みたいな…。(A氏)

2) 【透析が及ぼす生活上の困難】

＜透析によって束縛される時間＞は、透析のために拘束される時間がもったいないという思いや、事前に予定が立たない用件と透析の予定が重複した際の調整の困難さをあらわす思いである。

やっぱり冠婚葬祭となるといつ来るかわかんないじゃないですか。これからもっと多いただろうなと思って。そういうとき困りますよね。透析してるから行けないのっていうわけにもいかないし…。(C氏)

＜女性ゆえの就労・経済面の困難と不安＞は、透析の時間を確保するために時間の融通がきく仕事しか選択できなかったという思い、また、資格を持たない女性が病気を持ったときの就労の苦勞と社会の厳しさを感じたという思いである。

私みたいな女性が透析とかになって、アルバイトじゃなくてちゃんとした社員になろうと思ったら大変なんだあって。なんか世間の目は厳しいなみたいな。(C氏)

＜自己管理行動の苦勞＞は、常に頭のどこかにある自己管理とそのストレス、水分・食事管理の誤解・失敗、仕事、嗜好が原因による水分コントロールの困難に関する思いである。

ご飯食べたり食べなかったりしてたんですよ。体重が増えたと除水、引く量も多くなるんで、お水は飲みたいけどご飯食べたら体重増えるなあって、変な誤解があって。(C氏)

蛋白質の高いものが好きだったんですよ。(中略) だから最初もうヒステリー起こしながら1人でキーキー怒りながらイライラしてましたね。(B氏)

＜主婦役割と食事管理の両立の葛藤＞は、家庭の主婦として担う毎日の調理に伴う疲労感とそれによる食欲低下により、高カロリー食が思うように摂取できないうんざり感と、子供にまで高脂質の食事をさせたく

ないという母親としての思いである。

毎日脂っこいものって、結構見てるだけでもうんざりしてくるんですよ。で、やっと作り終えたときには疲れてるので食べたくないんですよ。正直言って、で、子供にもそんなに脂っこいものばかり食べさせたくないですー。(B氏)

3) 【透析と付き合っていくという諦観】

<自己の一部となった透析>は、時間が経過するにつれ透析のある生活に慣れ、透析が日常生活の一部になりつつある実感を持っていったという思いである。

こうやって1日おきに通ってるんだけど、それはもうみんなの中で当たり前のことなんです。だから普通の、うちでは日常の出来事になってるんですよ。

(B氏)

透析がないとね、命がなくなるっていうことでしょ。ま、これが仕事だと思ってるのと、それで苦になんないんだと思うんですけどねえ。これなかったら生きていられないからね。(G氏)

また、透析は人生の、また自分の一部であるが決して全てではなく、病気と共存し、透析とともに生きていこうという受け容れをしていた。

病気を抱えてきて、いろんなことをしながらやっていますので、病気が全てではないと。私の一部だと思うことですね。私自身は目標に向かって進んでる段階なので病気はそれの一部に過ぎない。(A氏)

<普通に生きるという信念>は、病気だからできないと病気のせいにせず、普通に生きたいという思い、その思いを背景に、病気に対する同情や、余計な気を使われることに苦痛を感じる思いである。

普通の人と同じように生活をして、仕事をしているつもりでいるんですよ。だから病気を持ってる、この人はかわいそうだ、庇護しようっていう思い、絶対持たれたくない。(E氏)

また、この病気は自己管理の不徹底によって生命が脅かされる危険がある反面、正確な知識の会得と自己管理の遂行次第で普通の生活を送ることは可能であるという自信を持っていた。

病気を持っていても普通の生活はできる、といつも思っているし、正しい知識を持って、自己管理をきちんとしていけば、病気なんか全然問題ではないと思うんですよ。(A氏)

透析療法を続けることで外見の変化が伴うが、女性として美しくあるための普通の手入れは続けよう、努力しようという思いを持っていた。

ごく普通に皆さんがやるようなお手入れをしているだけなので、でもそれすら体調が悪かったりするとできないこともあるんですよ。だからそれは自分の務

めとしてちゃんと毎日やろうと決めてやっています。

(A氏)

(趣味であるネイルアートを)楽しんでるっていうのは楽しんでるんだろけどね。こういうのをしなくなったときに自分がダメになっちゃうような気がして。だからきれいにしてる。(D氏)

<病気を忘れてはいけないという自戒>は、透析が生活の一部になり、自分にとっての普通の生活を取り戻す一方で、病気を忘れてはならないと自らを戒め、いかなるときも気持ちのどこかに透析を受ける自分を意識する思いである。

自分は健常者じゃなくって、やっぱり病気のことは忘れちゃうと、透析も来たくなくなるだろうし、薬も飲みたくなくなるだろうし、やらなきゃいけないことは最低限ありますよね。(中略)そこを忘れちゃうと、やっぱり全部が嫌になっちゃうと思うんですよ。(C氏)

4) 【透析がもたらした発展的变化】

<透析によって得た新たな自己>は、透析を受けるようになり、新たな自分を獲得し、病気になったからこそ生きている証を残したい、理想とする姿に邁進できるという前向きな思いである。

病気が自分の行動を変えたっていうことでしょうね。(中略)病気を契機に自分がどうあるべきかっていうことに直進できるようになったっていうのかな。

(E氏)

さらに、透析を受ける生活の中で心は健康になったという実感を得ていた。

人に(腎臓を)もらうの気持ち悪いつて思い出した(思い始めた)ときに、自分、身体はね、病気だけど、心は健康になってきたのかなあって。この辛い透析から抜け出すには移植さえすればって思ってたんだけどもそういう気持ちがだんだん、この何十年でたってるうちに無くなっちゃった。(D氏)

<支えの存在の感得>は、透析導入からある程度の時間が経過したとき、身近な子供や夫、パートナー、また健常者と同様に接してくれる友人、同病者あるいは医療スタッフといった自分に関わる人々や、自分の支えとなる事柄を再認識し、感謝の念を抱いたという思いである。

やっぱり周りに助けられてるということはつくづく思いますよ。自分ひとりでこうなったんでないということはいつも思いますね。(E氏)

夫が支えてくれたから…。透析の他にも子宮内膜症や卵巣嚢腫でずっと大変で…。それで透析にもなったから、ずっと離婚することを考えてた。夫には言いませんけど。(I氏)

仕事は自分を助け、元気にしてくれるといった思いがあった。さらに、何かに集中することが生きる支えになる、大変なことがあっても好きなことのためなら乗り越えられるといった思いも明らかになった。

(仕事を)細く長く続けていけたらいいかなあ、(中略)ほんとに自分が生き生きと自分らしく生きれるっていうのは仕事だと思ってのですね、私は。(A氏)

今こうやっていろんな病気してもね、(仕事の内容の説明)っていうことがあるからね、こうやってそれを目指にやっていけるんですよ。そういうものがなくてね、ただ療養のための生活してたらね、こう元気でいられないと思うよ。(E氏)

<透析とともに生きるための知恵と工夫>は、精神的安定を得るために、自己管理における制限を過度にせず、同病者の経験談を励みに生活面の工夫や新たな挑戦を試みており、病気、透析とともに生きていく上での工夫や知恵を持つという思いである。

前は手抜きは一切しなかった。そうしないとやっていけないんだよね。晩御飯は透析の日は手抜きするようにして。家族も1日おきに手の込んだ物食べられるってわかってるから、あれ食べたいこれ食べたいって言うてる。(J氏)

(水分を)飲み過ぎたりするとお風呂に入って(汗を)出すっていうか、ただ黙ってても出ないんで(中略)あまり湯気がないとこはちょっとお湯に入って上がると汗かいてそういうのでちょっと調整しながら、あと自分でできる運動するとか。(F氏)

<死の意識による人生の深まり>は、透析中、いつも死に向き合っている緊張感があるからこそ、日頃から様々なことについて、より深く考えるようになった、また死の瞬間まで希望を持ち、日々納得した人生を送りたいという思いである。

やっぱり安心だと思ってないし、いつも危険と隣り合ってる、何が起きるかわからない、いつでも、死、ということと直面してるんだという気持ちが中にあります。だからより深く考えるんでしょうね、いろんなこと。(A氏)

病気する前は全然先のことを考えないで、その時だけ楽しければいいやと思ったけど、(中略)私が亡くなったときのこととか、母親より先に死ねないのかな。(C氏)

5)【病気の母親ゆえの子供への思い】

<子供の行く末を案じ断念した妊娠・出産>は、透析患者となって子供は産めないだろう、愛する人の子供がほしいと考えたが病気が遺伝するかもしれないという恐れや、子供が五体満足ではないかもしれないと

いう不安によるためらいなどから妊娠・出産に踏み切れなかった思いである。

自分のことだけ考えるんだったらいいけども、やっぱり生まれてくるその子のこと考えると私もいつまでも長生きできるわけじゃないかもしれないし、産んだ方がいいけど死んじゃったみたいなの、その子もかわいそうだし、そういうことまで考えて。(C氏)

妊娠中は普通に育ってくるかもしれないけど、やっぱり産んだ後がね、やっぱり自分の病気引き継いじゃったらどうしようとかね。(C氏)

<病気の母親を持つ子供への負い目>は、透析による体調の悪さや、透析通院等のために家を空けたり、入院したりすることで子供に負担をかけ、申し訳なさを感じた思い、また、子供が現在は健康でも突然病気になるかもしれないという不安な思いである。

体調の悪さだとかなんとかっていうのは、どうしても隠せないですね。(中略)家事とかもできなくなっちゃうんでそうすると、子供が代わりに台所やったりとかするんですね。そういう姿を見ると余計申し訳ないなって思う。(A氏)

子供にそれが遺伝した場合ね、やっぱり子供は私を恨みはしないだろうけど、やっぱり私のせいだとは思いうだろうなって。それが今一番嫌な考えっていうか…それだけです。(C氏)

<子供にはさせたくない病気体験>は、病気体験を経て、子供には決して病気をしてほしくない、生活制限が厳しい透析生活はさせたくないという切実な思いである。

私が親になって、子供がそういう痛いとか何とか入院したとかあったらすごい辛いんだろうなって思うと…娘にだけは何かそういう病気だとかそういうのはしてほしくないなあと思って。それだけです。(C氏)

子供にはこんな思いさせたくないからうるさく言うんです。ラーメンの汁は飲ませないし、漬物も食べさせてないし。前の病院のときに小さい子が透析してるの見てかわいそうだったし…。(I氏)

<子供に残したい生き様>は、子供に自分の生き様をきちんと見せたい、また自分のことは自分でできるという生き方、ひいては母親がいなくなってもしっかりと生きることができるようなしつけを子供に残したいという思いである。

(病気のために)あれもしなかったこれもしなかった、やりたかったとかね、そういうことばかりで終わってしまったら、すごいなんかさびしいなっていうか、残された子供もいたたまれないだろうな、と思うんですね。(A氏)

全部、させる。何かあったときに何もできないじゃやっぱり困るんです。自分のできることは自分でする、できないことはしてあげるけど、できることは自分でしなさいって感じですね。(F氏)

6) 【母親役割維持の追求】

＜出産・育児は女性の領域＞は、それらが女性にとって重要なライフイベントであるという認識のもと、透析や身体症状があろうと育児は全うしたいという思いである。

女性の場合は、出産子育てっていうのを通して、男性から比べたらね、私は人生の厚みっていうか、すごいこう…先の方まで結構あると思うんですね。(中略) 頑張れる限りは彼女を支えてあげたいなと思うんですよね。(A氏)

＜病気の対処より優先された育児＞は、病状の進行・悪化を感じながら、病気の対処よりも育児を優先して行動するという思いである。

やっぱり子供小さいと、そんな自分の尿の色がすごいなと思ってもしちいち気にしてられないんで…。(B氏)

いやー、子供がねって、上の子は小学校入学だし、下の子は幼稚園入園だし、入院できないって言ったんですよ。入院する暇ないって言ったんですよ。(B氏)

7) 【母親としての挫折感】

＜理想の母親像具現の過酷さ＞は、自らの理想とする母親像がありながら、身体が思うようにならないという苦悩の思いである。

こういう病気を抱えてしまうといつも元気で明るくてっていうわけにもいなくなっちゃったので、(中略) 心配ももちろんするだろうし、そういう心配や不安を子供達にあたえなくなかったんだけど…。(A氏)

＜母親役割と療養行動の葛藤＞は、子供が成長し行動範囲が拡大するのに反比例するような体力低下で、子供の成長に合わせた母親行動がとれないという葛藤、また、子供が成長すれば育児の体力的な辛さが軽減され、病気も落ち着くという思いで、体力を過信し無理をしてしまったという後悔の念である。

抵抗力も落ちていきますので風邪も引きやすくなりますし、子供はその反対にどんどん大きくなるし、元気になっていくので、手はどんどんかかっていきますよね。でもなんか私の体調が悪くなると、ほんとにもうその辺が一番辛い。(A氏)

言い訳っぽいですがね。あとで思うとね。結局いろいろ考えてこうなってみて、誰にしわ寄せいって

いうと、結局一番さびしい思いするのは子供なんで、やっぱり子供のためにももっと自分を大事にするべきだったんだなとは最近思います。(B氏)

8) 【ケア役割という責務】

＜病気でも引き受けるしかない介護＞は、自覚症状があっても体調不良であろうとも、老親あるいは身近な近親者の介護を担わざるを得なかったという思いである。主婦役割や育児はもとより、介護は他の誰にも代われない女性の役割であると思っていた。

やっぱり自分の方がまだ母からみたら元気だなあって思うと、やっぱりそして待ってるだろうなあって思うとやっぱり体が動いてしまうっていう…。体の方は完全に疲れてるし、ああこれはちょっともう、足もむくんでくるし、血圧があがってるっていうのはわかるけれども、今私は倒れていられないなあと思う。(A氏)

血圧がずっと下がらなくて、蛋白はおりてなかったんだけど、主人が3ヶ月入院したんです。(中略) 主人の看病するのに、家庭のこともして、仕事もして、2人の子供の手引いて病院に毎晩子供連れて通って。(E氏)

＜透析が奪っていくケア役割＞は、家庭を支えるのは女性の役割という認識の上で、嫁・母親役割は健康でなければ務まらない、透析を受けることになった自分は、もはや世話をする主体としての存在価値を失ったという自己概念の喪失をあらわす思いである。

ばあちゃん(姑)が受け入れてくれると思わなかったんで。こんーな使い物、こんーなね、結婚して何年かで使い物にならなくなるような嫁なんか、やめてしまえって言われるんじゃないかって。(B氏)

たとえ子供がいたとしてもね、やっぱり(透析になる自分は)お荷物になるのは目に見えてるんですけども…。(B氏)。

V. 考察

1. カテゴリー間の関連

血液透析を続けながら生活する女性の思いの分析結果からカテゴリー間の関連について以下に見ていく。

透析導入前後から導入後1、2年の間に【透析に対する否定的感情】を抱き、日常生活において【透析が及ぼす生活上の困難】を経験しながら、徐々にそれらの現実を受け容れていくようになる。

導入後から約3年を経過し、【透析と付き合っていくという諦観】を得て、【透析がもたらした発展的变化】へと発展していく。以上のように、時間的経過を経て透析の受容には至るものの、その経過とは別に、透析を受ける自己との対峙のなかで【病気の母親ゆえの子供への思い】としばしば向き合うことになる。子

供の年齢や状況によって【母親役割維持の追求】に対する思いが強くなり、その役割を思うように果たせないなかで、【母親としての挫折感】を抱く。また、親の年齢や家族の状況によって【ケア役割という責務】が重くのしかかる状況が起こりえる。

岡本は、女性の成人期のアイデンティティ発達には“個としてのアイデンティティ”と“関係性にもとづく（とくにケア役割を担うことによる）アイデンティティ”の2つの軸があり、両者が等しい重みづけをもって発達していくと述べている¹⁶⁾。【透析に対する否定的感情】から【透析がもたらした発展的变化】にいたるカテゴリーは、“個としてのアイデンティティ”の発達と位置付けることができ、また【病気の母親ゆえの子供への思い】【母親役割維持の追求】【母親としての挫折感】【ケア役割という責務】の4つのカテゴリーは、“関係性にもとづくアイデンティティ”発達と関連付けることができると考える。

2. 個としてのアイデンティティ発達との関係

<受け入れ難く疎ましい透析>という拒否的な思いの総体は透析そのものへの思いだが、<得体の知れない透析>という不確かさからくる育児役割喪失の危機や<透析という荷物の重み>は心理面への影響といえる。さらに女性のボディイメージに関するこれまでの研究¹⁷⁾¹⁸⁾でも明らかになっているように、自己概念の変更を迫られる<外見が損なわれる苦痛>といった【透析に対する否定的感情】を抱く。

そのかわり、日常生活のさまざまな場面で【透析が及ぼす生活上の困難】を経験する。週3回、1回4時間程度の通院治療を必要とすることや予定外の出来事が起こった際の調整の難しさを考えると、<透析によって束縛される時間>という思いを抱くことは想像に難くない。<自己管理行動の苦勞>はこれまでの研究でも、血液透析患者にとって、日常生活上の食事・水分制限が大きなストレス源であることが指摘されている¹⁹⁾が、<主婦役割と食事管理の両立の葛藤>はこれまであまり指摘されていない。家族の食事を作るという主婦としての役割を認識しながら、調理による疲労感と自らの食事管理、また自らに必要な食事療法と主婦としての家族の栄養管理の間で葛藤しているといえる。また、<女性ゆえの就労・経済面の困難と不安>は、社会背景から男女問わず就労が困難という状況にはあるものの、生活の基盤を自ら構築しなければならない状況では、基盤そのものが揺らぐことになる。女性であることが就労の困難をもたらすという思いを持っていることが明らかになったといえる。

【透析と付き合っていくという諦観】から【透析がもたらした発展的变化】は、これまでの研究²⁰⁾でも明らかになっているが、以下、女性特有の内容としては、<普通に生きるという信念>が特筆される。透析

療法には<外見が損なわれる苦痛>でも見出されたように外見の変化が伴うが、女性として美しくあるための、またそうして自分自身を保つ努力をしているといえることが明らかとなった。

3. 関係性にもとづくアイデンティティ発達との関連

ケア役割の特質として考えられることとして、第1にケア役割は日夜絶え間なく続くこと、第2にケアされる相手が子供や老親であり自立にいたっていないこと、第3には核家族化に伴う家族内の潜在的サポート力の低下や、一人に負担が集中するなど社会・文化的要因が指摘されている²¹⁾。【母親役割維持の追求】における<病気の対処より優先された育児>は<出産・育児は女性の領域>という認識を前提としていえると考えられる。特に、【母親としての挫折感】における<理想の母親像具現の過酷さ>は、家事のみならず、家の雰囲気明るく保つというのが自らの役割と認識しているため、透析による身体的合併症や精神的変化が伴うときその苦悩は増すことになる。同様に、<母親役割と療養行動の葛藤>も、思うに任せない身体と子供の遊び相手をしたい思いとの間の葛藤といえる。また、<子供の行く末を案じ断念した妊娠・出産>は、24時間戦闘態勢で日夜絶え間なく続く育児の主体を自らの役割として認識しているからこそ見出されたといえる。

しかし一方で、子育て中の女性は、母親としての自己だけをアイデンティティとすることに葛藤をかかえており、個人としてのアイデンティティが閉塞されることを思い悩んでいる²²⁾ともいわれている。女性に個人としてのアイデンティティが確立して初めて、余裕をもって相手との関係をつくることができ、これは介護にも共通することが明らかになっており²³⁾、女性のこのような思いを医療者が理解する必要性は高いと考えられる。

<病気でも引き受けるしかない介護>は、他の誰にも代われないという責任感をもっており、ケアの一極集中が最も顕著に現れるところといえる。また、<透析が奪っていくケア役割>では、嫁・母親役割を十全に果たせない自分の存在価値を疑う思いが見出されたが、これは“個としてのアイデンティティ”発達にも影響を及ぼすといえることができる。

看護者は以上のような特徴を理解して、看護にあたるのが求められている。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は、透析導入後の年数や発達課題、透析歴、家族構成、職業、医療機関の特徴等に違いがあり、ここに研究の限界がある。

今後は、対象者数を増やし、対象者の特徴をより明らかにする研究が必要と考える。

VII. 結論

血液透析を続けながら生活する女性の思いを質的帰納的記述的研究で分析した結果、【透析に対する否定的感情】【透析が及ぼす生活上の困難】【透析と付き合っていくという諦観】【透析がもたらした発展的変化】【病気の母親ゆえの子供への思い】【母親役割維持の追求】【母親としての挫折感】【ケア役割という責務】というカテゴリーが得られた。

謝辞

本研究にご理解をいただき、インタビューにご協力いただきました対象者の皆さまに深く感謝いたします。なお、本論文は平成16年度北海道医療大学大学院看護福祉学研究科看護学専攻修士論文の一部を加筆・修正したものである。

文献

- 1) 日本透析医学会 (2011). 図説 わが国の慢性透析療法の現況, <<http://docs.jsdt.or.jp/overview/index.html>>
- 2) 野畑綾子, 尾崎紀夫. 透析患者の不安. 腎と透析. 2002; 53 (6) : 715-719.
- 3) Toombs, S. K (1993) /永見勇 (訳). 病いの意味 看護と患者理解のための現象学. 日本看護協会出版会, 東京, 2001, pp42-64.
- 4) 吉沢豊予子, 鈴木幸子編. 女性の看護学 母性の健康から女性の健康へ. メヂカルフレンド社, 東京, 2000, pp41-46.
- 5) 中井滋. 腎臓機能障害の社会復帰. 日本職業・災害医学会会誌. 2005; 53 : 195-200.
- 6) 中井滋. 特集 透析患者へのリハビリテーション I わが国における透析患者の社会復帰の現状. 臨床透析. 2002; 18 (9) : 1147-1154.
- 7) Polaschek, N. The experience of living on dialysis : A literature review. Nephrology Nursing Journal. 2003; 30 (3) : 303-310.
- 8) Tanyi, R. A. & Werner, J. S. Adjustment, spirituality, and health in women on hemodialysis. Clinical Nursing Research. 2003; 12 (3) : 229-245.
- 9) 二重作清子. 血液透析患者の病気の体験における心理のカテゴリー. 人間科学論究. 2000; 8 : 129-143.
- 10) 大本真由美. 外来血液透析患者の病いの体験に関する研究. 日本赤十字広島看護大学紀要. 2003; 3 : 103-108.
- 11) 出射史子, 加藤久美子. 慢性腎疾患患者の主観的体験世界. 岡山大学医学部保健学科紀要. 2001; 12 : 19-26.

- 12) 内田雅子. 透析をしながら働く中年期男性における生活史の編みなおし尺度の開発. 日本看護科学会誌. 1999; 19 (1) : 60-70.
- 13) 比嘉勇人. Spirituality 評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌. 2002; 22 (3) : 29-38.
- 14) 浅沼優子・看護学生に受け持たれる患者の「思い」に関する検討-Ethnonursingを用いて-. 岩手県立大学看護学部紀要. 2000; 2 : 69-79.
- 15) 舟島なをみ. 質的研究への挑戦. 第二版, 医学書院, 東京, 2007, pp170-180.
- 16) 岡本祐子. 女性の生涯発達とアイデンティティ背景と問題のありか. 「女性の生涯発達とアイデンティティ」, 第一版, 岡本祐子編, 北大路書房, 東京, 1999, pp i-vii.
- 17) 加根千賀子, 篠崎藍, 大石奈菜. 頭頸部癌術後に顔貌の変形をきたし形成外科の手術を受けた患者のボディイメージ. 日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ. 2012; 42 : 61-63.
- 18) 砂賀道子, 二渡玉江. 乳がん体験者の自己概念の変化と乳房再建の意味づけ. The Kitakanto Medical Journal. 2008; 58 (4) : 377-386.
- 19) シェリフ多田野亮子, 大田明英. 血液透析患者におけるストレスの認知に関する研究. 日本看護科学会誌. 2006; 26 (2) : 48-57.
- 20) シェリフ多田野亮子, 大田明英. 血液透析患者の心理的適応 (透析受容) に影響を与える要因について. 日本看護科学会誌. 2003; 23 (1) : 1-13.
- 21) 杉村和美. 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティの発達. 「女性の生涯発達とアイデンティティ」, 岡本祐子編, 北大路書房, 東京, 1999, 55-86.
- 22) 山崎あけみ. 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念-「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析-. 日本看護科学会誌. 1997; 17 (4) : 1-10.
- 23) 田中小百合, 泊祐子. 健康問題の発生による家族員間の役割移行-患者夫婦を軸として-. 日本看護研究学会雑誌. 2002; 25 (5) : 71-82.

受付: 2012年11月30日

受理: 2013年2月15日

The state of mind of female patients coping with hemodialysis in their daily lives

Reiko NIHONYANAGI

Department of Nursing

This study was to describe the state of mind of female patients coping with hemodialysis in their daily lives. A total of 10 participants who had received hemodialysis three times a week for more than a month were given semi-structured interviews, and the data were analyzed by qualitative and inductive methods.

The analysis revealed that female patients experienced the following psychological changes ; for the first one or two years of hemodialysis, “negative feeling toward hemodialysis”. Then they gradually accepted the reality of their situation by confronting “the difficulties of living resulting from hemodialysis”. Around three years after hemodialysis started, they acquired “getting clear vision to living with hemodialysis”, and evolved into “having a new worldview resulting from hemodialysis”.

In addition to clarifying the above process, the analysis found that, while having “particular feeling for their children as a mother with illness”. And they had “the desire to maintain their role of mother”, “being left with a sense of failure as a mother”, or “feelings of responsibility as a role of caring”.

Key words : hemodialysis, state of mind, female patients, nursing